

# 中国における日本製「～性」の受容

— 20 世紀初頭の中国資料を中心に —

## The Acceptance of Japanese “~sei” in China: Focusing on the Chinese Literature of the Early 20th Century

沙 広聡

SHA Guangcong

**提要** 根据以往的研究表明，汉语词缀“性”在其形成过程中，曾经受到过来自日语的影响。然而在此过程中，日语具体是如何影响汉语的、当时的中国人又是怎样翻译日制词「～性」的，这些还有待深入研究。本文通过调查 20 世纪初前后出版的中日第一手资料，采用对照研究的方法，从汉语的视角对日制词「～性」的译介情况进行了考察。通过分析，本文得出了这样的结论：在对日制词「～性」的采纳问题上，由中国人主导的翻译和由日本人主导的翻译之间存在若干差异；尽管如此，在 20 世纪以后兴起的大规模日书翻译活动的社会背景下，日语词汇不断涌入，“性”的词缀用法也因此得以发展并普及。

**キーワード**：接尾辞「性」 日中語彙交流 漢語 訳語 対照研究

### 目次

1. はじめに
2. 予備的考察
3. 漢訳和書に関する考察
4. 『申報』に関する考察
5. おわりに

#### 1. はじめに

接尾辞「性」は現在日中両語において共にあり、専門領域でも日常生活でも多用される。また、この造語法による語彙の中で、「可能性」「科学性」「流行性」など、日中同形のもものが広く存在する。「性」は中国起源の漢字であるものの、その接尾辞的用法が日本語の中で先に発達し後に中国語に影響を及ぼしたという流れは、先行研究を通して概観することができる。

しかし、接尾辞「性」の歴史において、日本語が具体的にどのように中国語に流入し影響を及ぼしたのか、不明瞭な点が多い。

本稿は、日中語彙交流の観点から、近代資料の分析に基づいて中国における日本製「～性」受容の初期段階における様相を明らかにする。

なお、論述に際して、漢字は引用の文脈も含めて現代日本の字体を用いる。

## 2. 予備的考察

### 2.1 対象語

接尾辞「性」を考察の中心とする以上、どのような語における「性」を接尾辞と見なし、どのような語における「性」を接尾辞としないか——接尾辞の判断基準について考えなければならぬ。

接辞の典型的な特徴として、単独で語を構成できず、常にほかの単位と結合して出現して形式的な意味を表すこと（野村、1978）や、語全体に新たな品詞性を賦与すること（『日本語学辞典』、1994）、造語力が強いこと（水野、1987）などが挙げられる。しかし、典型的な接辞であれば以上のような特徴を揃えているかもしれないが、漢語系接尾辞の場合、とりわけ発生段階にある接尾辞は、以上の特徴で判断することができない。なぜなら、これらの特徴を絶対的な基準として接尾辞を判断すれば、初期段階のものはすべて除外されることになるからである。

接辞と語基の関係について、水野（1987）は「静的にとらえる見方と動的にとらえる見方とがある」と述べ、さらに「語基の定義が異なるだけでなく、接辞の範囲もより柔軟に考えることができる」と指摘した。この見解は接尾辞の歴史研究にも当てはまると考えられる。つまり、接尾辞の形成は歴史的な観点から見れば、一種の動的過程であり、この動的過程を捉えるために接尾辞の範囲をより広く考える必要がある。

ここで筆者は次のような基準を設けて本稿の対象語を特定する。

- ①古典に存在しない、新たな概念を表現するために「性」を用いて意識的に作られた新語、または新義を与えられた旧語。
- ②意味用法の面において、「性」は独立的に機能する1語ではなく、前部要素と組み合わせさせて語全体として「～のような性質、状態、程度、傾向」を表す。

したがって、「漢字1字+性」であれ、「漢字2字+性」であれ、「性」で終わる語は上記の2つの条件を満たせば、すべて「性」の接尾辞的用法による造語と判断し、研究対象語として取り扱う。

なお、上記の基準の設定はあくまでも接尾辞「性」の歴史——「性」はいかに1語、また

は古典に現れた2字漢語の後部要素から、ほかの語の後ろに付いて生産的に新たな語を構成する接尾辞に変化したか——という動的变化を捉えるためだけの手段である。

## 2.2 先行研究

中国語における接尾辞「性」の歴史及び日中両語の相互関係に関する記述として、沈国威(1994)、楊超時(2017)が挙げられる。

沈国威(1994)は、3つの英漢辞典を利用して20世紀前半の接尾辞「性」「化」の辞書登録状況について考察を行った。その結果、1928年の『総合英漢大辞典』に至っても、接尾辞「性」「化」による造語は少なく、「まだ生産的に訳語を構成するパラダイムにおいてしかるべき位置を占めていなかった」と述べた。そしてこれは、英漢辞典の依拠となった当時の英和辞書で、接尾辞「性」「化」による造語法がまだ十分整っていなかったためだと分析した。

一方、楊超時(2017)は1896(光緒22)から1906(光緒32)にかけての4つの新聞雑誌を利用し、当時の中国語における接尾辞「性」の使用状況を考察した。「漢字2字+性」に関して、日本語からの翻訳文と留日学生による文章に早く現れ、その中に日中同形語と見られるものも多いため、中国語における「漢字2字+性」の出現には日本語からの影響があったと述べた。

上述の2つの考察は中国語における接尾辞「性」の歴史を記述した際に、いずれも近代日中漢語交流の観点を加えて日本語からの影響の可能性について検討を行っている。この点は大きい参考になるが、実証的な対照研究が欠けている。

したがって、次節では実際の日中資料を比較対照し、中国における日本製「～性」の受容実態を論究する。

## 3. 漢訳和書における日本製「～性」の受容

日清戦争後の1896(光緒22)年、中国政府では「日本を通じて西洋を学ぶ」取り組みが動き始め、日本に留学生を派遣し始めた。その後、公費留学生だけではなく、私費留学生も年々増えていった。一方、日本人も中国に渡り、教育現場で活躍するようになった。<sup>1)</sup>

「性」の接尾辞化に関して、従来の研究から日本語資料の中国語への翻訳によって加速したことは自明であるが、その翻訳活動はさらに日本人による翻訳と、中国人による翻訳に分けることができる。次節では、清朝政府によって設立された江南機器製造総局(以下、江南製造局)の漢訳和書及び学校用の教科書を用いて当時の翻訳状況を確認してみる。

### 3.1 江南製造局の訳書

江南製造局が刊行した『江南製造局訳書彙刻』の刻本117種のうち、日本書を原本に編まれた書物は3点のみである。後の大規模な和書翻訳活動と比べるとわずかであるが、中国における日本製「～性」の受容の初期段階における様相が窺われる。この3つの資料について簡単にまとめれば、次の表1になる。

表 1 『江南製造局訳書彙刻』に収録された漢訳和書<sup>2)</sup>

年	書名	著者・編者	訳者
1900 (光緒 26)	物理学	飯盛挺造	藤田豊八
1901 (光緒 27)	製屨金法	橋本奇策	王季点
1903 (光緒 29)	造洋漆法	田原良純	藤田豊八

また、接尾辞「性」の受容状況を確認するには、原本との比較対照が必要となるため、日本語の原本と中国語の訳本の書誌情報について次のように整理しておく。

表 2 原本と訳本の書誌情報

日本語の原本	中国語の訳本
1898 『物理学』(第 16 版) <sup>3)</sup> 飯盛挺造纂訳 丹波敬三・柴田承桂校補、丸善書店他	1900 『物理学』 藤田豊八訳、王季烈重編
1897 『合成金製造法』 橋本奇策、博文館	1901 『製屨金法』 王季点訳
1901 『増訂化学工業全書』(第 7 卷) 高松豊吉・丹波敬三・田原良純編纂、丸善書店	1903 『造洋漆法』 藤田豊八訳 汪振声参校

表 2 で示したように、『物理学』(1900 (光緒 26)) と『造洋漆法』(1903 (光緒 29)) は藤田豊八という同じ人物による翻訳である。一方で、『製屨金法』はその翻訳には日本人の参与がなく、中国人王季点が独力で完成させたと思われる。日本人主導の翻訳と、中国人独自の翻訳とは性質が違うため、次節ではまず日本人の藤田豊八による翻訳について考察し、その後中国人の王季点の翻訳について検討を進める。

### 3. 1. 1 『物理学』(1900) と『造洋漆法』(1903)

資料内容の考察に入る前に、まず訳者の藤田豊八の経歴について簡単に記しておく。

藤田豊八 (1869～1929) は日本の東洋学者で、1897 (光緒 23) 年から 1912 (民国元) 年にかけて中国に滞在した。彼が中国に渡った同じ年に中国人学者の羅振玉が上海で『農学报』を創刊し、藤田を招いて日本の農学書を漢訳させた。これがきっかけに藤田は日本書の翻訳を始めた。さらに、1898 (光緒 23) 年に彼は羅振玉らと共に東文学社を設立し、そこで日本語教師として中国人に日本語を教えるようになった。これらのことから、藤田は日本書の翻訳だけではなく、中国の翻訳人材を育成することに大いに貢献したとも言える。

『物理学』(1900 (光緒 26)) は藤田が中国人王季烈 (1873～1952) と協力し日本書の『物理学』を中国語に訳したもので、中国初の体系的な物理学書でもある。同書上編巻一では、「～性」が多く見られた。これらの「～性」の原本との関係について、筆者は日本語版の『物理学』と中国語版を照らし合わせたものを、表 3 にまとめる。

表3 『物理学』上編巻一における翻訳状況

原本	訳本		原本	訳本	
通有性	通有性	○	鬆性	隙積性	
填充性	体積性		変容性	変積性	
拒性	障阻性		被圧性	縮性	
碍性	碍性	○	習慣性	習慣性	○
惰性	恒性		膨脹性	漲性	
無尽性	不滅性		固性	固性	○
分性	分性	○	弾性	凹凸性	

○：一致する。

表3で示したように、日本語の漢語が全てそのまま中国語に借用されたのではなく、調整を施した上で取り入れられたものが相当数ある。「体積性」「障阻性」「不滅性」などの9語はその前部要素がいずれも原本のそれと異なっている。しかしながら、日本語から来た漢語の一部に対しては使用に抵抗が見られたものの、接尾辞「性」の用法に対しては滞りなく受け入れられたことは明らかである。

『造洋漆法』（1903（光緒29））について、同書の原文は1901（光緒27）年に出版された『増訂化学工業全書』第7巻の最初の2章「假漆」「樹脂油」に求めることができる。中国語の「洋漆」も日本語の「假漆」も英語の *varnish* の訳語でワニスという塗料の名前である。一方、「樹脂油」は英語の *Resin oil* の訳語で中国語の訳本では原本の「樹脂油」がそのまま受け継がれている。なお、*varnish* と *Resin oil* の2語は、いずれも日本語の原文に書いてあり、訳者の藤田は日本語を漢訳した一方、原文にある英語とドイツ語を多く残した。

「～性」の翻訳状況に関してまとめると、次の表4になる。

『物理学』と比べてこの本における日本製「～性」の受容度はそれほど高くないように見える。しかし、化合物名の翻訳における日本語名の中国語名の転換を除けば、「性」の接尾辞的用法は70%以上の比率で受け入れられ、後述の『製羈金法』の翻訳状況と比べれば、実に受容度が高いとも言える。

化合物名に関しては、表で示したように、日本語では「苛性曹達」「苛性加里」「苛性石灰」という意味または「意識+音訳」の方法を採用したのに対して、中国語では「鈉養輕養」など、あらかじめ用意された元素名で各種化合物を対訳しており、この方法は今日まで及んでいる。歴史的に見れば、中国では19世紀の漢訳洋書においてすでにこうした近代的な命名法が確立された。そのため、化合物名を表現するには従来の中国語名で十分であり、日本語名に置き換える必要がなかったと推測される。

表4 『造洋漆法』における翻訳状況

原本	訳本		原本	訳本	
護謨性	樹膠性		乾燥性	乾性	
展撓性	柔性		弾力性	弾力	
脂肪性假漆	脂油漆		耐久性	能耐久、能經久	
揮発性	揮発性、揮発之性	○	爆裂性ノ沸湧	爆裂沸騰	
粘靱性	粘靱性	○	脂肪性	脂性	
硬性	硬性	○	依的兒性	以脱性	
脂肪油性	脂性		苛性加里	鉀養輕養	
乾燥性	乾燥之性、乾燥性	○	酸性	酸性	○
苛性曹達	鈉養輕養		苛性石灰	鈣養輕養	
刺戟性	辣性		結晶性	結晶之性	
植物性	植物性	○			

○：一致する。

また表3と表4の用例を合わせて見ると、「膨脹性→漲性」「乾燥性→乾性」のような3字漢語から2字漢語への短縮と、「揮発性→揮発之性」「耐久性→能耐久、能經久」のような語から句・文への転換が起こっていることが分かる。これらの現象の理由については、中国語もしくは漢語の本来的な特性に求めることができよう。つまり、漢語は元来単音節語で、1音節でも1語を表すことができ、文字の結合があるがせいぜい2字までである。<sup>4)</sup>したがって、「漢字2字+性」というパターンは中国語の文脈に入ると「漢字1字+性」に短縮されたり、句・文レベルの表現に変更されたりして中国語の規範に合わせるように調整する必要が生じる。

しかし一方で、「弾性→凹凸性」「鬆性→隙積性」のような2字漢語から3字漢語への調整も観察される。これはいうまでもなく、近代西洋文明の流入と深く関わると思われる。すなわち、西洋の新知识・新概念を導入するにあたって、従来の「漢字1字+性」だけでは事足りず、前接要素にかかった字数制限を緩めることで、語彙レベルでより多くの事物や概念を表現することができると考えられる。

なお、表3と表4の用例を含めて、本稿で考察する訳語の中に日本からの借用ではなく、中国語内部の造語だと見られる語も混在する。例えば、『造洋漆法』に現れた「酸性」という語については、原文を確かめたところ、同じく「酸性」と書かれており、訳本と原本の間に借用関係にあるとも見えるが、実際、1875(光緒元年)年に出版された、同じ江南製造局の訳書である『化学鑑原続編』ではすでに「酸性」という語が使われていた。無論、『化学鑑原続編』

に現れた「酸性」は日本語とまったく関係なく、宣教師らが自ら作った語だとは言いきれないが、同書における「性」の使用状況と、日本語が本格的に中国語に影響を及ぼし始めたのは19世紀末以降であるといったことを総合的に判断すれば、19世紀末以前の中国資料に現れた新たな「～性」は中国語内部の変化と言わざるを得ない。

しかしながら、筆者の調査の限りでは、近代の日中両語において別々に作り出された語は「酸性」以外にほとんどない。もっとも、個別の語をめぐる日中両語間の相互関係を知るには、1語1語の歴史をたどらなければならないが、今回はそこまで深く掘り下げず、中国語が日本語の影響を受け始めた時期の「～性」の全体相を見ることにする。

### 3.1.2 『製錬金法』(1901)

『製錬金法』は中国人王季点(1879～1966)が日本書の『合成金製造法』(橋本奇策、1897(光緒23、明治30)年)を訳し、1901(光緒27)年に出版した漢訳和書である。この本は合金の製造に関する専門書で、金属の性質に関する文脈では「～性」がいくつか確認された。具体的な翻訳状況については、下表に示す通りである。

表5 『製錬金法』における翻訳状況

原本	訳本		原本	訳本	
通性	通性	○	可延性	韌性、牽力、韌力	
延引性	牽力		揮発性	此質～易化散	
延性	牽力		鎔解性	鎔度	
可延質	韌性		結晶性	成顆粒形	
強力性	任力性		磁力	吸鉄性	
弾力性	凹凸力				

○：一致する。

「～性」について、訳本だけを見れば、同書には「通性」「韌性」「任力性」「吸鉄性」の4例しかないが、原本のほうを確かめたところ、「延引性」や「揮発性」など、訳本にない語が多く確認された。このことから、中国人王季点が独力で完成させたこの訳本では、日本製「～性」に対する受容度があまり高くないと分かる。

王の訳語を見渡してみれば、「延引性→牽力」「結晶性→成顆粒形」のような、3字漢語から2字漢語、もしくは3字漢語から句・文への転換が半分近くを占める。これと関連して、「粘着力→粘力、黏力」、「鎔融点→鎔度」、「引伸力→牽力」など、原本では3字漢語であるが、訳本では2字漢語に書き換えられたことが目を引く。前述のように、これらの現象もおそらく中国語の本来的な特性と密接に関係するのであろうが、以上の3つの訳本における3字漢語の存在を考えれば、この時期は中国語において新しいタイプの3字漢語が増え始めた

転換期とも思われる。

その一方で、「可延質→韌性」、「磁力→吸鉄性」のような、原本では「～性」ではない表現であるが、訳本ではそれを「～性」と訳した現象も見られた。この点については、前述の「酸性」に似た話であるが、「韌性」も「吸鉄性」も実は 19 世紀後期の漢訳洋書にはすでにその用例があり、王はこれらの既存の語を用いて「可延質」「磁力」という馴染みのない表現を訳したと考えられる。<sup>5)</sup> また、「強力性→任力性」のように、「性」の接尾辞的用法だけが保留されたことも前節で議論した 2 書に共通している。

すなわち、日本人による翻訳と比べて中国人独自の翻訳においては、日本製「～性」への受容度がそれほど高くないが、「性」の接尾辞的用法は「～性」の使用頻度の高い日本書を翻訳することで中国語に多く持ち込まれた。

### 3.2 教科書

20 世紀以降、中国は日本を模して近代の学制を定め、全国各地で新式学堂の設立が盛んになった。そこで、学校用の教科書には漢訳和書が多く見られた。1904（光緒 30）年に出版された『高等小學生理衛生学教科書』はその中の 1 つである。同書は齋田功太郎の『生理衛生学』（1897（明治 30））を原本にしたものである。

此動物質ト砒物質ノ両成分ハ、常ニ能ク相抱合シ以テ骨ヲ構成ス。即チ骨ノ三分ノ一ハ動物質ニシテ、三分ノ二ハ砒物質トス。而シテ動物質ハ骨ニ弾力性ヲ附与シ、砒物質ハ骨ニ硬固性ヲ附与ス。

（齋田功太郎『生理衛生学』、1897（明治 30）年）

動物質与砒物質之両成分、常能相合以構成骨。其三分之一為動物質、三分之二為砒物質。動物質与骨以弾力性、砒物質与骨以硬固性。

（有機物は骨に弾力性を与え、無機物は骨に硬さを与える。）

（丁福保『高等小學生理衛生学教科書』、1904（光緒 30）年）

両書を照らし合わせれば、訳本に現れた「～性」は日本語をそのまま書き写したものとすぐ分かる。

『高等小學生理衛生学教科書』の著者である丁福保（1874～1952）は上海の東文学堂で日本語を学び、その後数多くの日本医学書を翻訳した。彼が日本書の『新纂児科学』（伊藤亀治郎、1901（明治 34、光緒 27））を漢訳し、1910（宣統元）年に同じ書名で出版した訳本には「加答児性」「化膿性」「炎症性」「痙攣性」など、数多くの「～性」が見られる。

丁と同様に 20 世紀前半の中国には各地の学堂で日本語を学習し、日本書の翻訳に取り組



んだ人物が多くいた。一方、日本側でも1900(光緒26)年に中国人留学生による翻訳団体が出現し、日本書の中国語への翻訳がこの年から盛んに行われるようになった。これらの翻訳書の中には、教科書として当時中国各地の新式学堂に採用されたものもある。<sup>6)</sup>

「性」の接尾辞的用法は日本人・中国人の日本書の翻訳活動によって中国語に多く流入し、一般学生の目にも止まるようになったと考えられる。

#### 4. 『申報』に関する考察

接尾辞「性」の受容は、近代中国の代表的な新聞紙の1つ『申報』<sup>7)</sup>(1872~1949)を通じて見ることもできる。

早期の記事における「性」は「性極高傲」(性格が極めて高慢である)や「稟性」「天性」など主に従来の意味用法で使われていた。新しい意味の例として、1895(光緒21)年3月31日の日本の疫病に関する新聞記事に「急性虎列刺」(急性コレラ)がある。これは『申報』における「急性」の初出例である。記事内容から見れば、「急性」はおそらく日本語からそのまま転用されたものと思われる。

20世紀に入り、「漢字2字+性」の用例が徐々に増えるようになった。比較的早期の用例として、「遺伝性」「習慣性」「流行性」などがある。次の例はいずれも『申報』での初出例である。

吾聞西人頗講遺伝性，抑其遺伝之有未善乎。西人聞之，其不失声而笑者幾希。

(西洋人は遺伝性というのをよく論じると聞いているが、その親譲りの稟性に不善もあるのだろうか。) (「寓言小説双靈魂(十三)」『申報』1907(光緒33)年3月24日)

二拋人類之性質區別之、可分為習慣性、職業性、偶發性三類。

(第二、人の性質によって、習慣性、職業性、偶發性の3類に分けることができる。)

(「沈家本調査日本監獄情形清單」『申報』1907(光緒33)年4月19日)

鄙人窃以霍乱為急行流行性之伝染病。

(コレラは感染速度が速い流行性の伝染病だと思っている。)

(「霍乱説」『申報』1907(光緒33)年9月10日)

「遺伝性」を除き、ほかの4語は日本語からの借用である可能性が大きいと思われる。

「習慣性」「職業性」「偶發性」の3語について、同年6月6日の報告書「大理院正卿沈家本奏陳調査日本裁判監獄情形摺」に「該員等將所見所聞輯訳成書(見学者らは見聞した物事を中国語に訳し本にまとめた)とあり、「流行性」については「霍乱説」という標題の下に「日本博愛

医院長棉貫与三郎述門人陳繼武訳（日本博愛医院長棉貫与三郎が述べ、学生陳繼武が訳す）とあり、両方とも日本語との関係が明記されている。「遺伝性」については、1886（明治19）年の『東洋学芸雑誌』ではすでに使われていたため、『申報』に現れた「遺伝性」は日本語からの借用である可能性もある。

『申報』全体から見れば、接尾辞「性」の使用は主に20世紀以降に現れ、「習慣性」「職業性」のような日本語からの借用語と思われる用例のほか、「漢字2字+性質」のパターンが数多く見られた。例を挙げれば、1900年代では「国民性質」「社会性質」「保守性質」が使われていたが、1910（宣統2）年に「国民性」、1918（民国7）年に「保守性」、1919（民国8）年に「社会性」が使用されており、時間とともに従来の「漢字2字+性質」が「漢字2字+性」に取って代わられたことが分かる。1930（民国19）年の新聞記事を見てみると、「刺激性」「保護性」「階級性」「複雑性」など、接尾辞「性」の使用はかなり一般化したことが分かる。

## 5. おわりに

以上、20世紀初頭の中国資料に基づいて、中国における日本製「～性」の受容について考察を行った。清朝政府が主導する江南製造局の訳書には、日本人による漢訳和書と中国人による漢訳和書があり、両者の間で日本製「～性」に対する受容の相違が見られた。しかし江南製造局の漢訳和書を含めて、20世紀以降に盛んになった日本書の翻訳活動は、日本語で多用された「性」の接尾辞的用法が大量に中国語に流入する契機となった。その結果、中国語における「性」の接尾辞化は日本語の刺激を受けて加速したと考えられる。

## 注

- 1) さねとう（1970）を参照。
- 2) 具体的には「物理学上編四卷中編四卷下編四卷 日本飯盛延造編纂 日本藤田豊八訳 日本丹波敬三 柴田承桂校補 長洲王季烈重編」、「製羸金法二卷 日本橋本奇策著 呉県王季点訳、「造洋漆法一卷続一卷 日本田原良純著 日本藤田豊八訳 六合汪振声参校」である。
- 3) 『物理学』は明治12年に初版が出されてから大正初期まで改訂されてきた。各版の内容を中国側の『物理学』のそれと見合わせれば、藤田が参照したのは恐らく第16版（1898（明治31）年）だろうと推測される。
- 4) 朱京偉（2011）を参照。
- 5) 19世紀に出版された漢訳洋書における「性」の使用状況について近日中に発表する予定である。
- 6) さねとう（1970）を参照。
- 7) 『申報』は近代中国において発行期間の最も長く、そして社会影響の最も高かった新聞の一つであり、中国現代新聞紙の発端でもある。1872年（同治11）にイギリス商人 Ernest Major（1841

～1908)に創刊され、1949年に廃刊になるまで、計77年間持続した。筆者は北京愛如生数字化技術研究中心のデータベース「申報數據庫」を利用した。

## 参考文献

### 【日本語文献】

加納千恵子(1991)「漢字の接辞的用法に関する一考察(3) —『性』の品詞転換機能について—」  
『文芸言語研究 言語篇』第19巻、筑波大学:73-84.

斎藤倫明・石井正彦編(2015)『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』  
おうふう.

佐藤慎一(1996)『近代中国の知識人と文明』、東京大学出版会.

さねとう・けいしゅう(1970)『増補中国人日本留学史』、くろしお出版.

朱京偉(2011)「蘭学資料の三字漢語についての考察:明治期の三字漢語とのつながりを求めて」  
『国語研プロジェクトレビュー』第4巻、国立国語研究所:117-141.

沈国威(1994)『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』、笠間書院.

野村雅昭(1978)「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究 IX』、国立国語研究所:  
102-138.

———(1981)「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』第49巻、岩波書店:22-34.

水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』第6巻第2号、明治書院:60-69.

森岡健二編(1991)『改訂 近代語の成立 語彙編』、明治書院.

吉村弓子(1987)「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」『日本語学』第6巻8号、明治書院.

### 【中国語文献】

陈力卫(2019)《东往东来:近代中日之间的语词概念》、社会科学文献出版社.

杨超时(2017)《近代中日词汇交流与“性”“化”构词功能的演变》、中国社会科学出版社.